

Face

地域SNSの連携が地域力を覚醒させる

2008年度の日経地域情報化大賞を受賞した。06年9月に兵庫県で立ち上げた地域SNS「ひよこむ」は、ユーザー数が4000人を超え、バーチャルとリアルのコミュニティが共鳴しながら着実に成長を続けている。しかし和崎さんが当初から目指していたのは、1つの地域SNSだけで完結するのではなく、各地のSNS同士を結び付ける仕組みだ。そのために開発したオープンSNP（ソーシャル・ネットワーク・プラットフォーム）は、現在全国で

25の地域SNSに採用され、連携が具体化しつつある。日経地域情報化大賞はこの取り組みが評価されたものだ。取材日は、地域SNSを活用して商店街活性化プロジェクトを実施している伊丹市立伊丹高校の情報科目の授業があった。講師の和崎さんのほか、関西学院大学総合政策学部の中條道雄教授と同教授の「地域フィールドワーク」を履修する学生もサポーター役で参加。生徒は彼らのアドバイスを受けながら、各

店を担当する商店の販促チラシづくりを行った。「教科書には出ていないことが学べる」と生徒の1人が言っていたとおり、「生きた学び」を実感できる授業だ。同校が商店街活性化プロジェクトに取り組み始めて6年目。「ひよこむ」と同様、生徒たちはサイト上でのつながりだけでなく実際に商店街にも足を運び、交流を深めながら具体的な成果を積み上げていった。店主や関学生と協力してハロウィンパーティーを毎年実施したり、08年11月にはダンスコンテストを開催して成功に導いた。

和崎さんの活動の原点は阪神・淡路大震災にある。避難所で最も役に立ったのは、信頼できる隣人による口コミ情報であった。だからSNSについても、ほどよく閉じた仕組みによってユーザー同士の信頼関係を維持し、そうした地域SNSがゆるやかにつながり合うことで、より強固なソーシャル・キャピタルが構築できると考える。そのための課題としては、第1にどの地域SNSともつながれるシステムにすること。総務省が開発したAPIを組み込めば、地元のSNSサイトにログインすると他のSNSの情報も見られるようになってくるが、現在これを採用しているエンジンはオープンSNPとオープンごろっとだけという。もう1つの課題は、オープンSNPのオープンソース化。これについては09年春を目処に開発中だ。「SNSでコミュニケーションが活発になれば人が動き始める。人が動けばモノが動く。情報の地産地消をしつつ、それらをつなぐことで日本は変わる」と和崎さん。壮大な夢は確かに現実へと変わりつつある。



PHOTO/五十嵐秀幸

インフォミーム(株)代表取締役 和崎 宏さん Hiroshi Wasaki

1957年福岡県生まれ。琉球大学物理学部卒。情報コンサルタントとして活動していた1995年、阪神・淡路大震災で情報ボランティアとして関わる。その体験から地域活性化のためのインターネットの重要性を痛感し、1996年、兵庫県播磨地域初のインターネットプロバイダー「インフォミーム(株)」を設立。